

宿縁

六月号

浄土真宗
本願寺派

中原寺

TEL 〇四七―三七二―〇二九二
FAX 〇四七―三七二―〇二六二

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号

得道の人に

励まされて歩む



このイラストは築地・法重寺若坊守さんが作成されました

分け登る 麓の道は多けれど
同じ高嶺の 月を見るかな

一休禅師が詠んだとも伝えられるこのうたですが、受け取り方に難しさがあります。皆さんは、よく次のような場合の表現にこの歌を引き合いに出しませんか？
「信じる宗教にはいろいろあるけれども、どっちみち到着点は一緒だよ！」
これは、仏教は心の平安(さと)りを目指すのだから、結局どの道を行っても変わらない

という論理です。

こうした論理は一面分かってはいるよう肝心なところが抜けてしまっているように思います。

なぜなら自分は一步を踏み出そうとしてなついで仏教を眺めモノにしているからです。つまり地図上の山を見て登る道はいくつもあると知っているだけなのです。肝心なところというのは、道は沢山あると知ったところで自分ほどの道を登るのかを決めて歩まなければ永遠に頂上に至ることはできません。

残念ながら現代人の多くは自分で歩いてその道を確認することをしなくなりました。情報さえ知っていれば、いつでも目的地へ往けるという頭でわかったつもりの人たちです。カーナビ、スマホが案内してくれる時代、確かに便利さはありますが自分の足の裏が覚えたというものではなくなりました。

仏教は「仏道を歩む」のです。数々の先人が歩んだその道を学び信じて歩むのです。

親鸞聖人は教行信証(信巻)の中で、「信には二種あり。一つには、たださとりの道があるだけで信じるのであり、二つには、その道によつてさとりを得た人がいると信じるのである。たださとりの道があるとだけ信じて、さとりを得た人がいることを信じないのは、完全な信ではない」と涅槃

経の文を引いて述べています。

浄土真宗で日々大切にしているお聖教は「正信念仏偈」です。親鸞聖人が仏教は念仏であると確信した道と、その道を歩まれた人々(インド・中国・日本の七高僧)に出遇った喜びの偈(うた)が略して「正信偈」といわれるお聖教です。つまり念仏を正しく信ずる人々の徳をたたえた喜びの讃歌といえます。すべての人びとが歩むことができる道、それは釈尊によつて示された阿弥陀仏の願いに生きる念仏道であり、その道を歩まれた人びとに励まされて歩む道だからと、私に示してくださいました親鸞さまのお言葉です。

見渡せば時代を超えて皆さんのまわりにも念仏道を真摯に歩む人が必ずいます。直接会うことができなくても、その人の生きた姿勢や言葉に遇うことができます。

私自身にもいつも頭に浮かぶ人物がいます。実業家であり、協和発酵の会長にあり、在家仏教を主唱された尊い念仏者加藤辯三郎さん(二八九九〜一九八三)です。

ある人の紹介で、加藤さんはアメリカのみやげ話をNHKの「朝の訪問」で話すことになりました。そのとき、アナウンサーが、氏が仏教信者であることを知っており、アメリカで列車の転覆事故にあったとき、念仏をとなえられたか、との質問をされた。

それに対して、「事故の瞬間も、また傷を負ったと知ったときも、別に念仏はとなえなかった。ただ、痛いだけだった。」と答えた。そしたら、アナウンサーは追っかけて、こうたずねてきた。「あなたが、それだけの大事故にあつていながら、ほんのかすり傷ですんだのも、あなたが念仏をとなえていられたか

らではないか」というのである。それに対し

「念仏を、そういうふうには利己的に考えられるのは、大きな間違いである。実は私自身も仏教というものを知る前は、そういう考えであり、この考えが、私の仏教に対する考え方を大きく誤らせていたともいえる。念仏をとなえていたから、怪我をしないとか、念仏をとなえたからお金がもうかり、あるいは会社が発展するとか、あるいは念仏によつて病気がなおり、健康が保てるとか、長生きできるとか、念仏そのものを、まるで魔法使いの呪文のようにとられることは、大きな間違いである。念仏とは、こうした考え方はまったく逆のものである。どんな病気になるうが、どんな怪我をしようが、なおかつ、責任をだれにも転嫁しないで、いつさいの責任を自分に感ずるような、そんな世界をいう、そうして、どんな境遇にあつても、つねに、感謝するという、そういう心境をいう。」ということを話されました。

またNHKの宗教番組に出演し、若い司会者がこう質問されました。

「加藤さんは普段からお念仏を口にされていますが、念仏を称えるとうなりましたか？」(司会者)

「君は念仏を称えたことがありますか？念仏を称えたこともない者にはどういつても分からないでしょう！」(加藤師)

まさに道を歩んでいる人と道を眺めている人の違いですね。

仏教はその教えの優劣ではありません。私自身が道を求め、得道した人を信じて自らがその道を歩むとき、人生が自ずと開かれてまいるのです。

【寺灯雑記】

○「ユーチューブ中原寺」で法話が聞けます！

新型コロナウイルス感染拡大により、全国が緊急事態宣言となってお寺の諸行事も延期または中止せざるを得なくなりました。

これまではいつでも自由にお寺へお出かけができましたが、皆さまの中から動画などによってコミュニケーションができないものかとのご意見があり、五月初めから本堂でユーチューブによる短い法話を配信ようにいたしました。

まだ試験的で動画による未熟な画面ですが、スマホからアイパッドからパソコンから「ユーチューブ中原寺」で検索してお聞きいただければと思います。

また是非、機器に強い若い人たちにもお知らせください。配信は不定期ですが一週間か十日に一度の割合にしています。

○彼岸会法要と宗祖降誕会、永代経法要は無参拝者の中で勤める

二月二十九日に予定していた「教行信証を学ぶ」講座から中原寺のすべての法座・法要・行事を中止してまいりましたが、その間の春季彼岸会法要と宗祖降誕会法要並びに永代経法要につきましては、寺族（住職、前住職とその家族）でお勤めをいたしました。いつもなら、本堂いっぱいに参加者のお念仏や読経の声が響くところ、数人でのお勤めはさみしく感じるものがありました。その分、一生懸命大きな声で読経している子どもたちとお勤めさせていただきました。

【仏教語講座「愛嬌」(あいきょう)】

「男は度胸、女は愛嬌」とか、「愛嬌をふりまく」など、愛嬌といえ、にこやかでかわいらしいこと、相手を喜ばせるような振る舞い、愛想のよいことなどを意味する言葉として知られています。

また「ご愛嬌」といえば、座興やちよつとしたおまげやサービス、あるいは至らないうところを許してくださいという意味でも使われています。

この愛嬌は本来、「愛敬」と書いて、「アイギョウ」と読む仏教語でした。親愛や尊敬の念をもつことを意味したのです。

仏・菩薩の容貌は温和で慈悲深く、拝む人たちが愛敬せずにはおられない相を表しておられるので、その相を「愛敬相(あいぎょうそう)」といいます。

また、「愛想がよい」とか、「愛想が尽きた」などと使われている愛想という語も、本来は「愛相」で、そのもとは同じ愛敬相から出た語のようです。

同じ愛敬相ですから、「愛嬌・愛相」が生まれ、それが「愛敬・愛想」となったようですが、いずれも、もとは仏さまのお顔の相だったのです。一方、「仏の顔も三度まで」という言葉もあるように、愛想よくしてもらっているからといって、調子に乗らないようにしたいものです。

(機関誌「大乘」五月号より)



伝言板

【お家の方へ】

大切なのは「姿」で語ることに

朝、三人の子どもを小学校に見送るついでに「ホットモーニング」た題して通学路で勝手に挨拶運動をしています。半分以上の児童は「おはようございます」と挨拶してくれます。中には不審者と思ったのか逃げ出す児童や(誰?)と聞いてくる児童もいます。あまりしつこく挨拶して防犯ブザーでも鳴らされたら大変ですので、ほどほどにしています。

そんな中、いつも横断歩道に立ち、子どもたちの安全を見守ってくださいのおじいさんがいます。そのおじいさんは、言葉をあまり発することがありません。しかし、満面の笑顔で横断旗を振り、子どもたちに無言の挨拶をしています。その男性にハイタッチしたり、握手を求める児童もたくさんいます。

おじいさんには、自分の子どもや孫はいないそうです。ただただ、地域の子どもの安全を思い、立ち続けることを楽しみにしているのかもしれない。その姿に何とも言えない有り難さを感じます。生き様はときに「姿」として現れ、言葉を超えるメッセージを残してくれます。小手先を駆使するのではなく生きる姿を磨くこと。その大切さを痛感しています。

(むらかみ けん)

「仏教」子ども新聞」より

【法座・行事の案内】

○いのちの居場所を考える会

*六月十一日(木) 午前十時〜十二時

○常例法座

*六月二十一日(日) 午後一時

おつとめ・讚仏偈

講師：小柴隆幸師(葛飾区 隆照寺)

○門信徒会役員会

*六月二十一日(日) 午後二時半

※時間変更にご注意ください

○教行信証を学ぶ(行文類)

*六月二十七日(土) 午後二時

○婦人会法座

*七月四日(土) 午後一時

○壮年会法座

*七月四日(土) 午後三時

※各法座・行事にご参加の際はマスクの着用をお願いいたします

【お詫びと訂正】

五月号宿縁一面の法話の中で密と蜜の字の使い方に誤りがありました。三密は「密」、波羅蜜多と壇蜜さんは「蜜」の字でした。お詫びして訂正します。

【六月の掲示板のことば】

現代は 家はあっても 家庭がないといわれる